

じんけん瓦版 第51号

発効日：2014年1月26日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

獄中者と共に

マリア 高木 栄子(名古屋聖ステパノ教会)

名古屋聖ステパノ教会信徒マリア高木栄子と申します。今回、東京教区人権委員会「じんけん瓦版」の紙面に於いて、わたしが所属している教会の働き的一端を紹介する機会を与えてくださったことに對し感謝申し上げます。

2013年2月21日、東日本大震災の被災地である福島県相馬郡新地町にある「支援センターしんち」を訪問していたわたしに電話が入りました。ステパノ教会の管理牧師からです。「執行された」「誰ですか?」「恵喜さんに決まっている」「……!」

そう、わたしに連絡が入るのだから、恵喜さん、パウロ加納恵喜(かのうけいき)さんに決まっているのです。何故なら、わたしは恵喜さんの教母であり、死刑執行1週間前まで、名古屋拘置所に面会に行き、手紙のやり取りをしていたからです。しかし、「誰ですか?」という間抜けな質問をするほど、あまりにもそれは突然であり、予想していない出来事でした。第二次安倍政権の発足後初めての執行でした。

わたしが恵喜さんに初めてあったのは2003年頃です。獄中にいる恵喜さんについて管理牧師から話があり、何人かの信徒が交代で面会に行き、文通をするようになりました。交流を深めるうちに恵喜さんは、洗礼・堅信の希望を持つようになりました。

名古屋聖ステパノ教会は、毎月1回「全体集会」というものを開催して、ほとんどのことをそこで決めたり、承認したりしています。恵喜さんの希望を聞いたわたしたちは、果たして市内5教会のうち名古屋聖ステパノ教会が引き受けてよいのか全体集会で協議しました。というのは、その時点ですでに死刑確定の信徒が2人いたからです。他の教会も積極的に関わった方がよいのではという意見も出されま

した。結局、現時点では、教会全体で獄中者支援が可能なのはこの教会ではないかということで、迎え入れることを決めました。教父母は、恵喜さんの思いもあり、また教会全体で支援し、教父母も支えるということで、わたしも引き受けることにしました。

名古屋高裁で死刑判決が出されたすぐ後、2004年2月12日、名古屋拘置所内でパウロ恵喜さんが誕生し、主イエスと共に歩む生活となりました。

2007年3月、最高裁で上告棄却、死刑が確定されてしまいました。その間もその後も、いろいろなことがありましたが、結果的には最後の1年、退職したわたしは、それまでと違い、より多く面会に行くことができるようになりました。面会では、本当にたわいのない日常生活に関する話やずっと交流を続けている市原信太郎司祭ご一家(特に娘のむーちゃん)の話が中心でした。恵喜さんはステパノ教会メンバーの安否も必ず尋ねていましたが、かつて野宿生活を余儀なくされ、現在アパート生活をしている2人の信徒のことはとりわけ身近に感じていたようで、いつも話題にのぼりました。面会に行ったことや、恵喜さんから送られてくる絵入りのはがきは教会のメンバーに紹介し、いつも共にいるということをお話しは感じていました。

毎年クリスマスには、名古屋拘置所のキャロリングに出かけ、塀の外から「メリークリスマス!」と大きな声で呼びかけていました。「聞こえる」と言ってくれていましたが、今回のキャロリングは、恵喜さんがいなくなって初めてのものでした。

大罪を犯すと、なぜ国家がその人を死刑にできるのでしょうか。今もその疑問をかかえて生きています。

世界エイズデー（12月1日）の近い日に、人権委員会は、カトリック中央協議会 HIV/AIDS デスク、日本キリスト教団新宿コミュニティー教会、ルーテル HIV/AIDS プロジェクトと共催で、「世界 AIDS・DAY 記念礼拝」を捧げています。昨年は、19回目で、12月1日に牛込聖公会聖バルナバ教会で祈りと交わりの時を持ちました。礼拝の中で、HIV/AIDS の方々を支える立場にあるお二方からメッセージをいただきました。要約を寄稿いただきましたので、以下に掲載いたします。

孤独のなかで

私は、7年間ほど18歳までの子どもがかける電話相談に関わる機会がありました。日々の出来事、対人関係をはじめ様々な電話がかかってくる。ある時、女性の電話相談員が性の電話を受け、「セックスする時に中出しは妊娠の危険性があるけれど口内射精であれば危険はないのだろうか？」と私に尋ねてきました。電話相談員の養成をする際に性について学ぶ機会を設けていましたが、主に妊娠や性別による身体の違いを取り上げてきました。危険といった時に妊娠のことしか考えていませんでした。いつか性感染症の感染経路について質問された事例を思い出し性感染症も危険の一つであると感じたのです。

私においては、女性の相談員からの質問を受けるまで性感染症の存在は知りながらも自分や自分の周囲の人、電話をかけてくる子ども達には全く関係のない話だと思っており、特に意識せずに過ごしていました。急遽、電話相談に関わる者同士で性感染症について学ぶ機会を得まして、HIV/AIDS に関心を持ちました。今まで HIV/AIDS について、病気の存在は知りながらも一部の人の話だと思っていて、私の周りにその一部はいないと思って目を向けてこなかったからです。私自身、HIV/AIDS についての知識は、学校で習ったこと程度しかなく HIV/AIDS に感染しても普通の人と同じように生活を送ることができるという印象でしたが、学びの中で初めて HIV 陽性者の方々が抱える生活の困難さや生きづらさを知りました。

子どもの電話相談の現場では、子ども達が性交渉を早い機会に持っていることを聞く機会があり、「セックスをしている時は、自分が大事にされている、興味を持ってもらえる、一人で孤独ではないと感じる、さみしさがやわらぐ気がする」と話してくれた子どもがいました。電話を受けた時に、私のことを見て、大事にして、私の話をきいて、私は生きていいの？

釋真心(僧侶・元子どもの電話相談スタッフ)

という声にならない声が、その子の今にも溢れてしまいそうな心の叫びが聞こえてきました。日々、かかってくるたくさん電話の内容はそれぞれ違います。しかし、子ども達は私達にボク存在を認めて欲しい、否定しないで欲しいと求めてきているように感じています。電話相談とは言いながらも相談員が何か子ども達にしてあげられることやアドバイスできることはほとんどありません。してあげられることといえば、受け止めきれない感情を一緒に整理したり、ただ一緒に時間を過ごすことくらいです。それでも、電話が鳴らない日はなく、親をはじめ周囲にいる大人に話を聞いてもらう機会がなくつまづきや生きづらさを抱えながら生きているのだと受話器の向こう側の数多くの子ども達が教えてくれました。

私においては、おかれた環境で今まで感じたことを大事に、目の前のことに向き合っていくことしかないのではないかと考えています。私自身も日々生きにくさを感じながら毎日手さぐりで生きています。自分のありのままの姿で生きることができない、何かに後ろめたさを感じ取り繕ってしまう気がする、安心できない、自分のスケジュールがうまくまわらないと自分をもてあましていくように感じる、特にいのちを私自身を関係性の中で生きることハードルが高くなってきていると感じる今日この頃です。

私は、仏教徒です。礼拝には袈裟、衣を着て念珠を持ち参加させていただきました。宗教は縁により違えど、仏教徒の中にも HIV/AIDS に苦しみや痛み、悲しみに心を寄せている者がいます。

HIV/AIDS 陽性者の方々をはじめ、つまづきを抱えている方々、生きにくさを抱えている方々、どなたも一人一人が安心できる世の中を念じつつエイズデー礼拝のメッセージに代えさせていただきます。

AIDS と出会ってから

佐藤直美（国会議員秘書）

はじめて「エイズ」という言葉を耳にしたのは中学二年生の時でした。「龍平の未来—エイズと闘う 19 歳」という本を読んだ時のことです。この本は、東京 HIV 訴訟の原告である川田龍平さんの日常の姿を、フォト・ジャーナリストの広河隆一氏が写真におさめたものです。同時に、川田龍平さんの母である悦子さんが、当事者の視点から薬害エイズについて語り掛けた形式になっています。本が発刊された 1995 年は東京 HIV 訴訟の最中でした。川田龍平さんが未成年者で初めて実名を公表した年でもあり、ニュースで話題になっていたことを覚えています。

その後大学生になり、もう一度「エイズ」に出会う機会がありました。大学では経済学部に入學し、所属したゼミの研究テーマが開発経済学でした。特にアジアの発展途上国に興味を湧き、セックスツーリズム（性風俗を目的として旅行すること）を調査していました。タイのバンコクに研究旅行に赴いた際コンビニエンスストアのレジ脇にコンドームが販売されていることに衝撃を受けました。タイでは外貨を稼ぐために性風俗産業が隆盛した時期に、HIV ウイルスや性感染症の蔓延が問題になりましたが、その後国がコンドーム・キャンペーンや啓蒙活動を行い市民にも関心が広がり対策がとられました。このタイの状況を知った時に日本ではどういった対策がとられているのだろうかと思ったのが、HIV/AIDS 対策に関わるきっかけとなりました。そして当時通っていた大学の近くで活動をしていた横浜エイズ勉強会に所属し、活動を始めました。

横浜エイズ勉強会は 1994 年にアジアで初めてのエイズ国際会議が横浜で開催された際に発足した団体です。国際会議は医師や専門家の集まりで、会議に参加するには約 10 万円も費用がかかりました。その際に、市民誰でもが学べる場を作ろうと「AIDS 文化フォーラム」という会議が誕生しました。この事務局を担当したのが横浜エイズ勉強会です。「AIDS 文化フォーラム」は今でも継続しており、毎年 8 月上旬に横浜で 3 日間開催されています。市民誰でもが参加できる会

議として、3 日間の来場者はのべ 4,000 人にもなりません。一昨年からは京都でも「AIDS 文化フォーラム」が開催され、昨年は陸前高田でも「AIDS 文化フォーラム」が立ち上がりました。

2005 年には、神戸でアジア太平洋国際エイズ会議が開催されました。当時大学生でしたが、厚生労働省から補助金を受けてユース代表の一人として国際会議に出席しました。会議の議場で中学生の頃に本の中で出会った川田龍平さんと面識を持つことができ、今の活動にも繋がっています。現在は、政治家の秘書として働き、横浜エイズ勉強会や AIDS 文化フォーラムの活動を通して出会った方々と政策提言の実現を目指してともに活動しています。

こういった市民活動は、学生を卒業して社会人になると仕事が忙しくなって自然と辞めてしまう方がほとんどです。なぜ活動を継続できたかいうと、横浜エイズ勉強会で出会った感染者の方の言葉があったからです。

「HIV/AIDS 撲滅という言葉は好きじゃない。実際に僕は HIV に感染しているのだから。HIV/AIDS が撲滅されたら、僕の存在も消されてしまうということでしょう？ 感染者は、自分たちが普通の人間として、普通に幸せな人生を送ることを望んでいる。こうして普通に会話したり、一緒にお酒を飲んだりしてくれることが幸せだよ。」

10 年以上前の感染者の方のこの言葉が、今でも心に残っています。何かを変えようと多くの人に伝えようとすると、どうしても「撲滅」や、「だめ、絶対」のような強い言葉でセンセーショナルに問題を伝えようとしがちです。しかし、一つの身近な問題として寄り添うことで、人を癒したり助けることができると学びました。

HIV/AIDS の問題はまだまだ関心が薄く、HIV ウイルス検診の受診者数は伸び悩み、一方感染者は増えています。HIV/AIDS の活動で出会った人達との御縁を大切に、予防・啓発の運動をしながら感染者の方々とも寄り添って今後も活動を続けていきます。

「日の丸・君が代」強制の即時中止を求め、強制に立ち向かう人、苦しむ人のために祈る

祈りの会

～第12回・信教の自由を求めて、キリスト者のつながりを～

ますます右傾化し信教の自由までもが脅かされようとする中で私たちがどのように戦っていけるのかを話し合いたいと思います。

*日時：2013年2月15日（土） 14:00～16:30

*場所：日本同盟基督教団 椎名町教会

豊島区南長崎 4-2-6（大江戸線落合南長崎駅下車 3分）

・14:00～ 祈りとメッセージ

小林 伊佐美さん（日本同盟基督教団 椎名町教会牧師）

岡田 えり子さん（JECA 主都福音キリスト教会）

・15:00～ 懇談会

・お話し 村瀬俊夫 さん（日本長老教会）

主催「日の丸・君が代」強制に反対し、信教の自由を求める超教派キリスト者の会
お問い合わせ 人権委員会 090-2432-8428（森田）

「宗教者九条の和」主催 第6回 憲法講演会

憲法九条と集団的自衛権

——講演と対談——



松浦 悟朗師

日本が戦争する国とならないために！
宗教者は祈り行動しよう！



孫崎 享氏

●第1部：講演1 松浦悟朗（カトリック大阪司教区・補佐司教）

講演2 孫崎 ^{うける} 享（駐イラン大使、防衛大学教授等歴任）

●第2部：対談 松浦 悟朗と孫崎 享

●日 時：2014年2月22日（土） 13:00～16:00（開場 12:30）

●場 所：カトリック麴町 聖イグナチオ教会 ヨゼフホール（JR 四谷駅 下車1分）

●入場無料（どなたでも参加できます）

主催「宗教者九条の和」 お問い合わせ 03-3461-9363